

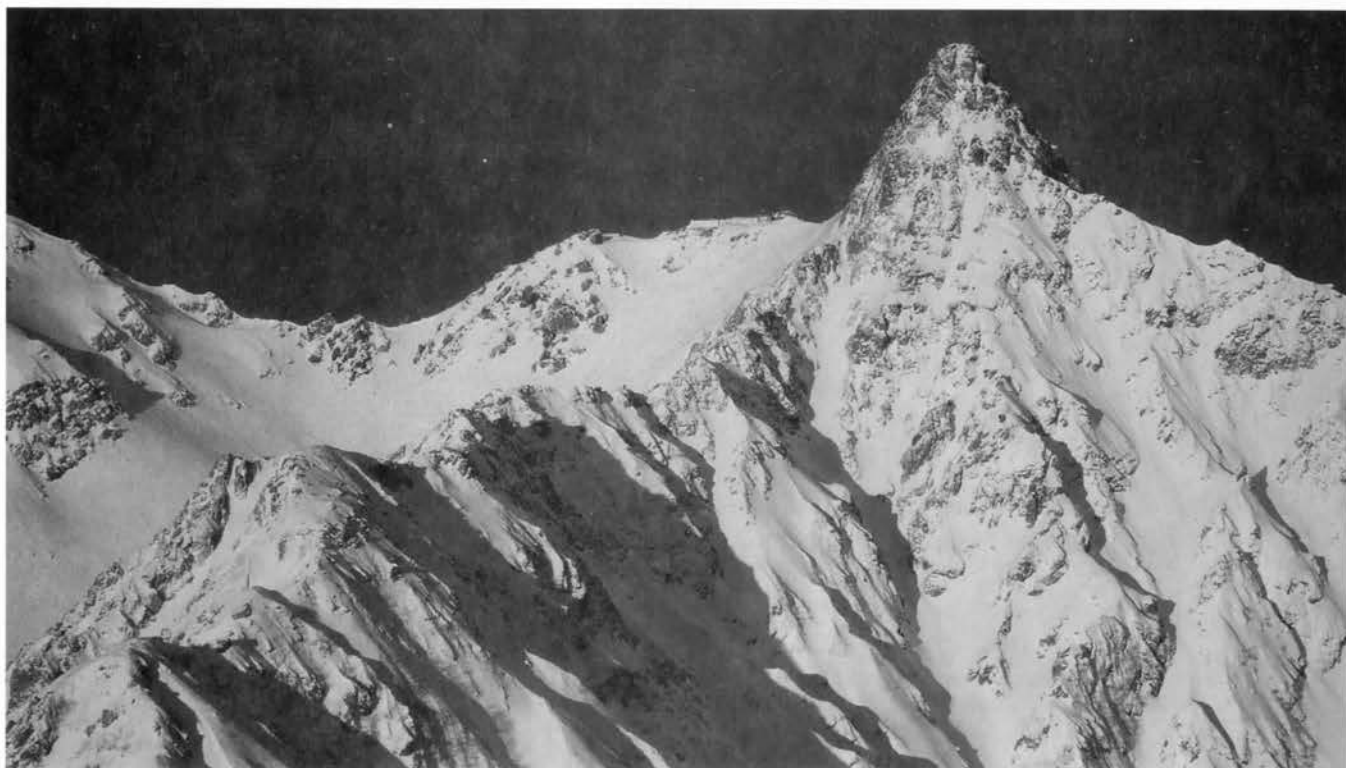
# 山と博物館

第50巻 第9号 2005年9月25日

市立大町山岳博物館

特別展「槍ヶ岳讃歌 近藤辰郎写真展」特集号

会期：平成17年9月3日(土)～9月15日(木) ※9月5・12日は休館



## 厳冬の朝 西岳山頂から1月上旬

撮影データ：リンホフスーパーテニカV EBC フジノンT400<sup>2</sup> F8  
f22・16 1/30秒 EPR フィルムサイズ4×5インチ

## 開催にあたって

### 市立大町山岳博物館

「コンタツおじさん」と親しまれ、山々に名をはせる近藤辰郎さんの写真展を開催するはこびとなりました。

近藤さんは永年、北アルプス全域とりわけ後立山連峰と槍・穂高連峰の撮影に力を入れてきました。「槍ヶ岳讃歌」は三〇年におよぶその集大成のひとつです。

「集大成」というと「渾身の芸術作品」をイメージしがちですが、磊落(らいらく)で爽やかな人柄の近藤さんは、やはり近藤さん流のまとめ方です。はじめて槍ヶ岳を間近にしたとき、独特の姿に誰もが「わあーっ、きれいだなあ」と素直に感動します。近藤さんはそんな感動のエッセンスを四季折々にたっぷり盛り込んで、外連味のない、すつきりとした作品群に仕上げています。

本展が槍ヶ岳へのいざないの一助となりますことを、おおいに期待しております。

ご高覧のほどお願い申し上げます。

### 近藤辰郎氏プロフィール

一九三五年(昭和一〇)九月、東京都新宿区牛込納戸町に生まれる。一九六五年、東京総合写真専門学校を経て、写真家・横山宏氏のアシスタントとして富士写真フイルムのジャイアントカラー撮影(八×一〇インチ)に携わり、四季の山岳写真取材を務める。その後、フリーランスの写真家として独立。北アルプス全域、なかでも後立山連峰と槍・穂高連峰の撮影を続ける。山岳・アウトドア雑誌・写真集に作品を発表。写真展多数開催。

月刊「山と溪谷」誌において一九七三年四月号から一九七六年三月号までの三年間、表紙写真撮影を担当。最初の一年間は自作自演の作品で、これ以降「ヒゲの写真家コンタツおじさん」と呼ばれるようになる。一九九五年より主催している「コンタツ・フォトクラブ」には、年齢や職業を超えた幅広い人びとが集まっている。

## 槍ヶ岳讃歌

近藤辰郎

## 厳冬の朝

西岳山頂から一月上旬(表紙写真)

厳冬の山なみや気象条件を撮影するため  
燕岳へ通い始め十年が経過した。

最初は燕岳の冬山景観を撮っているうち燕山荘の赤沼淳夫さんの好意で冬期小屋を管理するメンバーの皆さんと気持ちが良い、常駐の方々やそのうち地元、安曇野に住んでいる人々と接してひとつのグループが出来上り、大天井岳、そして西岳へ足を延ばして行った。

途中、大天荘に一泊して赤岩岳通過は夏道と違い、鋭い岩稜帯をザイルを使い往復するので冬山経験者をリーダーにして行き、西岳稜線は風下の地形を利用して冬山用テントで滞在する。

八年目にして折からの好天気恵まれ槍ヶ岳の冬姿を眼前にとらえることができた。

## 梓川畔のニリンソウ

明神古池にて五月中旬

槍ヶ岳を源流にする春の上高地は残雪の穂高岳と共に一年中で一番すばらしい季節を迎える。

花は期間を追って一斉に咲き出して、ニリンソウは群落で咲き、上高地明神の古池や明神から徳本峠への山路の途中、徳沢の草場が代表的なポイントになる。

花は天気の良いときはすばらしい顔を見せるが雨天は花を閉じてしまうので光線が良く回る高曇り状態が良く、日本人好みのしっとりとした質感と森の中に咲くムードが出るからで、あとは微妙な光線状態をよく観察しながら撮影すること、また群落の花は周辺の環境をうまく配しバランス良く構図を取ることが大切になる。

## 春雪の槍沢と槍ヶ岳

横尾尾根 P3から3月下旬  
撮影データ：リンホフスーパーテヒニカV ジンマー S150<sup>3</sup> F5.6  
f32・22 1/60秒 EPR フィルムサイズ4×5インチ

## 春雪の槍沢と槍ヶ岳

横尾尾根 P3から3月下旬

信州安曇野に在住する山仲間とプランを練り、僕の撮影

したいポイント我希望して行ったのが横尾尾根ピーク3で初日は上高地から横尾避難小屋に泊り、二日目に横尾谷を2のガリー出合まで行き、そこから急峻なる斜面を登って行く前方に行くメンバーの足の踵が目前に来るほどの登りで上方から雪のかたまりがあまり多いので見るとカモシカが雪面を横断していたりでコルに出てから、ピーク3の頂にテントを張り翌朝はすばらしい天気恵まれた。

槍沢を目下にして槍ヶ岳から穂高岳、特に屏風岩が対斜面に位置して迫力ある岩壁を見せ、また常念岳も一ノ俣谷の上に突き上げてピラミダルな山容を見せるすばらしいポイントだった。

## 槍ヶ岳の肩に沈む落日

美ヶ原高原思い出の丘から四月下旬

毎年春、四月中旬から下旬にかけて信濃毎日新聞に掲載される槍ヶ岳頂上に沈む夕日を一度撮影したいと思い、当時写真部に在籍していた方や地元、里山に居る友人の写真家から情報を手して最初は山麓から望遠レンズを持参してスタンバイしていた。

また美ヶ原高原へ撮影会の講師で王ヶ頭ホテルへ泊りお世話になって山の上からの情報も入手、山麓より標高二千メートルある高原の方が空気自体も澄み、春特有のヘーズや夕方に出る雲で山麓からは撮れないときがある。

また常念岳と槍ヶ岳が高原上から撮ると重ならないポイントを選定出来たこと、多少のヘーズで直接ピント合わせが楽になったことなどで、日本で一番高い峠である飛騨乗越へ沈むのが僕は構図的にバランスが取れたのとダイナミックな情景が撮れたことがなにより収穫だった。



梓川畔のニリンソウ 明神古池にて五月中旬

撮影データ：フジパノラマ GX617プロ EBC フジノン SW105<sup>3</sup> F8  
f45 1/1秒 RVP+1 フィルムサイズ6×17センチ



春雪の槍沢と槍ヶ岳

横尾尾根 P3から3月下旬  
撮影データ：リンホフスーパーテヒニカV ジンマー S150<sup>3</sup> F5.6  
f32・22 1/60秒 EPR フィルムサイズ4×5インチ



槍ヶ岳の肩に沈む落日 美ヶ原高原思い出の丘から4月下旬  
 撮影データ：ペンタックス645N SMCペンタックス645 600<sup>mm</sup> F5.6ED リアコンバーター併用 X2  
 f9.5 1/180秒 RVP+1 フィルムサイズ6×4.5センチ

**晴れゆく槍・穂高連峰**  
 双六岳から八月中旬

撮影基地である飛騨側の双六小屋はたおやかな乗越だ。付近には双六池テント指定地があり登山者のオアシスになっていて、二三泊して撮影には好条件のすばらしい所である。しかし槍ヶ岳や穂高連峰を撮るには樺沢岳か双六岳の肩までどちらも小屋から五〇分か六〇分位は登らなければならない。特に早朝は槍・穂高連峰側が逆光線になるが西鎌尾根をガスが流れるカットが撮れることもあるので行きたい。また双六岳の肩からは午後天気が安定していれば夕刻にかけて斜光線になるので山自体が立体感が出る。だが多分にも大自然、ガスが出てまた夏は雷雲が出る可能性もあるので、この点には充分気をつけて行動したい。またヘッドライト



晴れゆく槍・穂高連峰 双六岳から8月中旬  
 撮影データ：フジパノラマ G617プロ EBCフジノン SW105<sup>mm</sup> F8 f32 1/4秒 RVP+1 フィルムサイズ6×17センチ



コバイケイソウと北鎌尾根 硫黄乗越付近から8月上旬  
 撮影データ：リンホフスーパーテヒニカ V スーパージンマー XL アスフレリック80<sup>mm</sup> F4.5MC  
 f32 1/15秒 RVP100F フィルムサイズ4×5インチ

やレインスーツは必ず携行すること。この作品を撮影したときはガスが出て山は見えず双六岳山頂で待つこと三時間で急にガスが切れ徐々に槍・穂高連峰がその全貌をあらわして来た。

**コバイケイソウと北鎌尾根**  
 硫黄乗越付近から8月上旬

槍ヶ岳から西側へ派出している西鎌尾根は反対側の東鎌尾根より冬の積雪が二重山稜上にたまり夏にはその雪融けの所から順を追って高山植物が順次咲きほこつて来る。これらの地形は東鎌尾根の岩稜帯と少し違い登山者の目を楽しませてくれる地形になっている。

三俣山荘付近から10月上旬

長野、岐阜、富山の三県にまたがる三俣連華岳の基点にある三俣山荘は近くに黒部源流や高瀬川源流の多くの沢が入り、三俣蓮華岳の雪田から水が取れるのでテント指定地としてもすばらしい所。山荘の前庭から天気が良ければ午後から夕刻にかけて秋の斜光線の太陽が回ってくるので山々は立体感が出る。気流の関係か今のところ、僕は晴れる確率が多く恵まれている。

雲海先端が高瀬川下流から上流にかけてゆつくりと入り、折からの落日と相俟って、このチャンスを逃さず事前にスタンバイして待つこと。もしうまくマッチングすれば最高のスーパーショットとなることだろう。

この作品はパノラマサイズ

双六小屋から樺沢岳を槍ヶ岳へ行く途中に所々この地形が現われ、夏の早い時期などは残雪が多く残っている。

三、四年に一度しか花を付けないコバイケイソウと会うときは思わず心が躍る。条件が厳しく、また土壌も平地と違い栄養分がないのでこの分長い年月を待たないと花を付けないことかなとも思う。

足元にある他の植物に気を配り撮影することが肝心だ。

**暮れゆく槍ヶ岳と雲海**



暮れゆく槍ヶ岳と雲海 三俣山荘付近から10月上旬

撮影データ：フジパノラマ GX617プロ EBC フジノン W180<sup>3</sup> F6.7 f22 -1/3 1/4秒 RVP +1 フィルムサイズ6×17センチ

**秋の彩りに染まる槍沢**

山々の秋は変化が早く、夏山が終る八月下旬頃から稜線はその気配が表われてくる。よく、ひと雨ごとにとという言葉通りで日に日に山小屋で天気待ちしていると良くわかる。稜線の高山植物の葉が黄色、橙から赤色と変化して千差万別で楽しませてくれる。

日時が進行すると同時に中腹から麓へと紅葉ラインが下りて行く。



秋の彩りに染まる槍沢 10月上旬

撮影データ：リンホフスーパーテヒニカV シロナー N135<sup>3</sup> F5.6MC f64 1/1秒 RFP フィルムサイズ4×5インチ

カメラなので右側に槍ヶ岳と北鎌尾根と雲海、そして左側のピークは大天井岳でバランスを取る構図でまとめた。

**二重山稜と槍ヶ岳**

蝶ヶ岳は初夏に現われる雪形が蝶々に似て現われ地元では昔から農作業の目安として利



二重山稜と槍ヶ岳 蝶ヶ岳から12月下旬

撮影データ：リンホフスーパーテヒニカV EBC フジノン C300<sup>3</sup> F8.5 f45 +1/3 1/15秒 RVP +1 フィルムサイズ4×5インチ

槍沢のナナカマドの植生は天狗原分岐から帯状に上部から下流に伸びているので槍ヶ岳を配したり、東鎌尾根を背にまたツバメ岩を入れたり、ロングやアップで光線具合を見ながら撮影を進行して行く。ハイライトは氷河公園の天狗原ノ池からの槍ヶ岳で晴れたときの感じとまた曇天の雰囲気が大分違ってくるので撮影する側の感性で決定するとよいだろう。

陽が傾き午後の光線状態になると雪面のディテールが美しく光線の当りようでその斜面のグラデーションの美しさがなんとも言えないチャンスとなってくる。

(アウトドア・フォトグラファー)

用していたと聞く。また槍ヶ岳や穂高連峰の展望地としても有名なポイントで春山で三回、夏山七、八回、秋山三、四回、冬山で三回撮影で入山している。この山稜は二重山稜で形成されていて池や夏遅くまで雪田が残っている地形もあり、その周辺では雪融けと同時に高山植物が咲く。雪形の残る地点も大滝山への稜線上にある草原で多くの植物が見られる。

冬の尾根上は西からの季節風が強く雪も乾燥している。西側は飛ばされて岩稜が出ているが東側の風下に多く積雪が見られる。

山と博物館 第50巻 第9号

発行 二〇〇五年九月二十五日発行

〒398-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六―二二二―二二二二

FAX 〇二六―二二二―二二二二

E-mail:sanpak@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpak/

印刷 奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)



この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。